子縁が地域コミュニティー形成にもたらす影響に関する研究

秋田大学　学生会員　○中村 光太郎
秋田大学大学院　正 会 員　鈴木　雄
秋田大学大学院　正 会 員　日野　智

1. はじめに

近年、地域のコミュニティーの喪失が指摘されている。コミュニティーの喪失は地域としての活力や機能を低下させる恐れがある。地域のコミュニティーを醸成する要因としては、町内会や地域の祭り、ボランティア活動などが挙げられている。本研究は子どもを中心とした人々の新たなつながりである「子縁」に着目した。「子縁」とは子どもの親同士や、子どもと高齢者との交流など、子どもを通してコミュニティーが醸成されることを指すもので、近年注目され始めた概念である。本研究は、子縁による地域コミュニティーの醸成について検討・考察することを目的とする。

2. 調査概要

本研究では、秋田市内の御所野、川尻、大住の 3 地域を対象とし、直接配布・郵送回収方式による意識調査を実施した。調査票は 600 世帯に 1200 部を配布し 201 世帯から 284 票を回収している。調査内容は、子縁の状況、地域の課題解決意識などである。

3. 地域での子育てに関する意識

地域全体で子どもを育てる必要性の認識を**図 1**、地域の子どもの教育への関与の意向を**図 2** に示す。ほとんどの被験者が地域全体で子どもを育てる必要があると回答しているが、自身がその教育に携わりたいと回答したのは約 56%にとどまる。

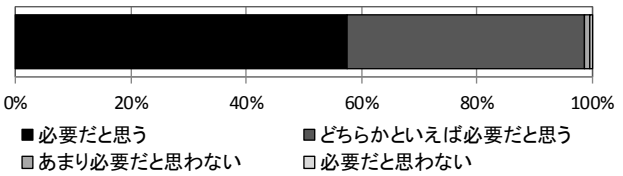

図 1　地域全体で子どもを育てる必要性の認識

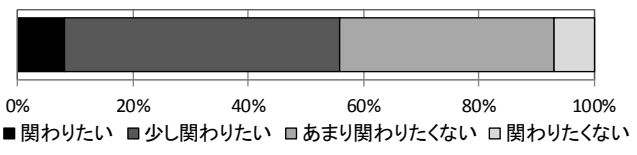

図 2　地域の子どもの教育への関与の意向

4. 子縁の大きさによる分類と満足度および効果認識

本研究では、子縁の大きさにより被験者を Level1 から Level5 までの分類を行った（**図 3**）。Level1 は近所の子どもを見かけることもない被験者、Level5 は子縁により知り合った人と出かけたり相手の家に行ったりすることのある被験者である。

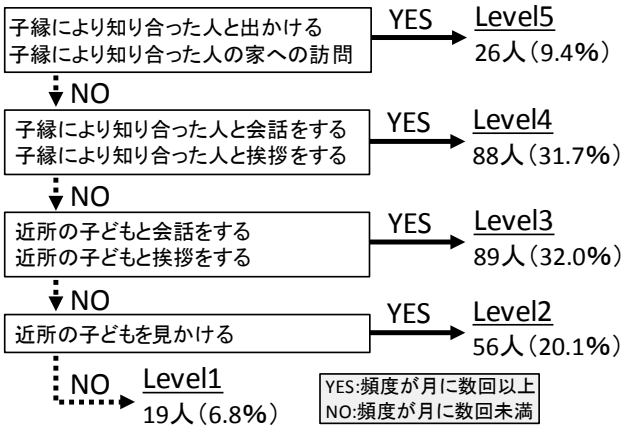

図 3　子縁の大きさによる被験者の分類

次に、子縁の大きさ別にみた行事および各種活動への参加状況を**表 1** に示す。全体的に子縁の大きさの高い被験者の方が行事や活動への参加状況が高くなっている。この要因として、子縁の高い被験者には子育て中の人も多く、行事に参加せざるをえないことが考えられる。一方、「共同清掃」や「お祭り」では Level5 より Level4 の被験者の方が参加状況が高い。

表 1　子縁の大きさと行事・活動への参加状況

	Level1	Level2	Level3	Level4	Level5
共同清掃	32%	50%	71%	74%	65%
安全パトロール	0%	11%	19%	30%	19%
共同除雪	5%	13%	23%	34%	38%
お祭り	21%	40%	53%	67%	62%
小中学校運動会	21%	30%	37%	51%	52%
地域運動会	16%	20%	27%	40%	42%
地域食事会	0%	23%	28%	48%	50%
地域植栽活動	0%	5%	13%	16%	15%
コミセンイベント	5%	2%	19%	35%	38%
問題解決WS	0%	2%	1%	7%	8%
地域ボランティア	0%	4%	21%	19%	27%
高齢者子ども交流会	0%	4%	4%	7%	12%
親の交流会	5%	16%	18%	26%	38%
地域健康教室	5%	7%	13%	24%	15%
町内会会長会計	5%	14%	25%	17%	8%
保護者会役員	5%	16%	18%	27%	38%

キーワード：子縁、生活の質、意識調査分析
連　絡　先：〒010－8502　秋田県秋田市手形学園町 1－1　TEL(018)-889-2767　FAX(018)-889-2975

子縁の大きさと生活の満足度の関係を**図 4** に示す。「普段の生活で外出できる範囲」や「近所づきあいの内容」、「町内会活動への参加」では、子縁の大きい被験者ほど満足度が高い。子縁によるコミュニティーの醸成から生活の満足度が高くなったことが考えられる。

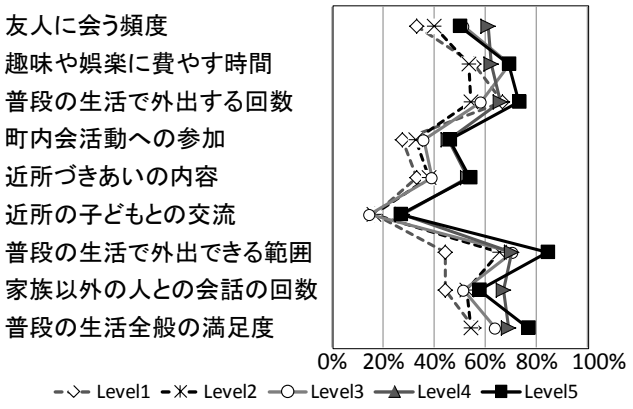

図 4　子縁の大きさと生活の満足度

次に、子縁の大きさと地域の子縁の効果認識との関係を**図 5** に示す。子縁の大きい被験者ほど、子縁による地域への効果を認識していることがわかる。実際に子縁の効果を子縁の効果を経験したことがその要因と考えられる。一方で、近所の子どもを見かけることもない Level1 の被験者であっても、子縁による地域への効果認識は低くない。「子どもが遊ぶのや元気にしているのを見ることで自分も元気になれる」の項目では 55%もの被験者が効果を認識している。普段子どもと接することの無い被験者であっても、地域に子どもがいることを重要だと感じている。

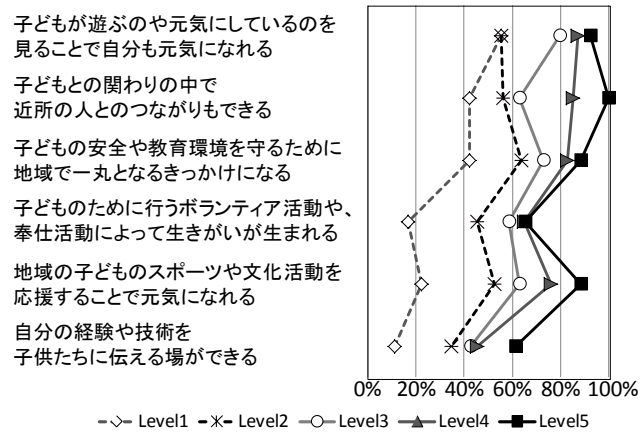

図 5　子縁の分類による子縁の効果認識

5. 子縁による関連要因の構造

子縁の大きさ、子縁による効果認識、地域との関わりの状況、地域の課題解決のための責任について、共分散構造分析を行った。「効果認識」としては、地域に子どもがいることで考えられる効果の「地域の子どもを見ることで元気になる」など 6 項目、「地域との関わり」では既往の研究[1]からソーシャルキャピタル関連要因として「生活の同伴」などの貸し借りの指標 7 項目とした。関連要因のパス図と各相関係数を**図 6** に示す。図に示したパスはすべて優位傾向を示したものである。適合度指標の GFI もおおむね高く、子縁レベルから「効果認識」や「地域との関わり」への影響とそれらからの「課題解決のための責任」への関係性が示されている。各相関係数をみると、子縁の大きさは「地域との関わり」よりも「効果認識」の方が大きく、「責任」へのパスは「地域との関わり」より「効果認識」の方が大きい。子縁の大きさが地域に子どもがいることによる効果の認識につながり、そのことが地域課題解決への責任につながっていることがわかる。

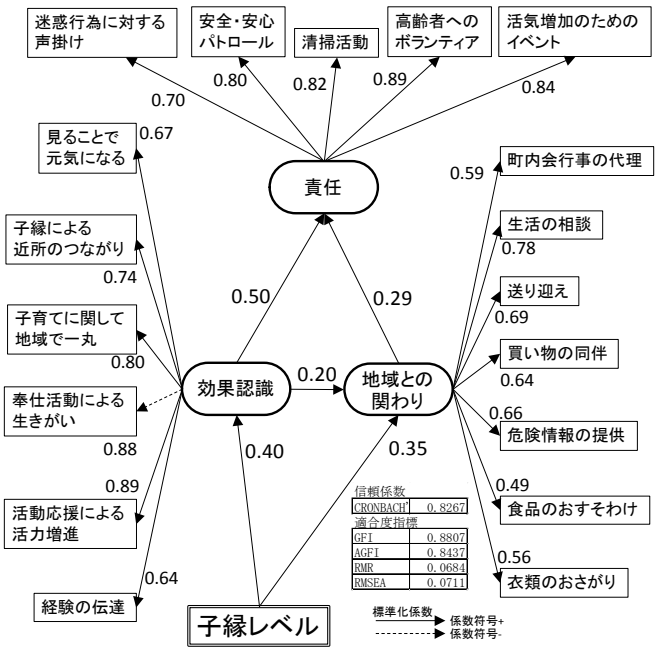

図 6　子縁による関連要因の構造

6. おわりに

本研究では、子縁と地域のコミュニティーに着目し分析を行った。子縁レベルの大きい被験者の方が、普段の生活の満足度や地域に子どもがいることによる効果の認識が大きい。さらに、子縁レベルと効果認識、地域との関わり、地域への責任の関係についても明らかとなった。今後は、子縁を通じたコミュニティー醸成の過程分析が必要である。

参考文献

1) 川原さおり、木村一裕、日野智、田口秀男：「まちづくりや地域的課題における住民の参加と期待感について」, 土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集, 2010